超人たち

渡辺公暁

雨の夜は手製の宇宙服を着て墓地へ出かけることにしている。

墓石の並んでいるあいだをわざとゆっくりと歩き、開けたようになっている場所で立ち止まってから、私はできるだけ背すじを伸ばし、目を閉じて顔をあげ、深呼吸しながら自分の鼓動のタイミングを計る。私の血液が、宇宙服の表面をおおっていく水滴に対抗して熱を出しはじめた瞬間、私は右のこぶしをぐいと空に突き上げ、そしてじっと待つ。

しばらくたっても、私の体に変化はない。雨が線香受けを叩く音は変わらず聞こえている。私の皮膚は少し不健康な黄土色のままだし、私の心臓は胸の内側に収まっているし、私の身長は一・六メートルで、私の体重は約〇・〇五トンしかない。

私は巨大な超人にはやはりなれないままこぶしを下ろす。

体内にピンセットが埋めこまれているという幻想に、ずっと前からとりつかれていて、だから自分のおなかをなでてみることがよくある。

いかにもうさんくさい顔つきの医者が私の顔をのぞきこんで「はい」と手品でもするみたいにピンセットをかざし、それを私のおなかに押しこんでしまうという記憶は、もちろん間違いなく夢なのだが、あまり繰り返しこの夢を見るので、こう思いこんでしかるべき事件が私の過去にあったのではないかと疑ってしまう。それは幼いころ電池を飲みこんでしまったせいかもしれないし、ほんとうに手術を受けたことによるのかもしれない。

ひょっとしたら、離乳食を口に入れられるのがたまらなくいやだったということかもしれない。しかし、いまのところ私に発電力はないし、手術のあともないし、かぜをひいたとき真っ先に考えるのはおかゆを作ることだ。親にきいても知らないと言われたので、自分にトラウマがあるのかどうかはわからないままになっている。だから原因ははっきりしないのだけれど、またピンセットの夢を見た。医者の手袋がおなかをなでる感触が、いつになく不快でたまらなくて、私は目を覚ました。外では昼から続く雨がやまないでいる。暗い自室で雨音をきくと、幼いころのことをまた考えてしまう。

幼稚園のころだったと思うが、小さな映画館で、音も映像も荒れてしまった古いモノクロ映画を見た。どんな映画だったかは、もうすっかり覚えていないけれど、ほとんど真っ暗な画面の中で、足音だけがゆっくりと周期的なリズムで響くシーンだけは、いまでも忘れることができない。実際には、人間が通りを歩いているありふれた情景だったのかもしれないが、私はその足音にすくみあがっていた。大きな太鼓の感じよりもう少し長く残る響きが、私の耳元へ近づいてくる。フィルムの古さからくる小さなノイズをかきわけて、何か途方もないものが、私のところへやってくる。それとも巨大な影は、私を軽々とまたぎこして、あるいは踏みつぶして、別のところを目指すのだろうか。まだ映画館の座席につまさきまですっぽり納まるぐらいに小さかったそのころの私は、ほとんど窒息しそうなほど呼吸を潜めながら、あるはずのない地面の揺れを、腰のまんなかに感じていた。

とにかく雨の夜になると、いつもこの映画を思い出す。紙がゆるやかに

焦げる音に似たあのノイズは、夜更けに降る雨の音にそっくりだからだ。

記憶ばかりが頭を満たして何も考えられそうにないとき、私は眠るのをやめて布団の上に体を起こして、窓から入ってくる水のざわめきにひたっている。ときどき、地鳴りのような足音が、たしかにいま聞こえたと思える瞬間がある。ゆらめきが耳の底に残っているうちに、私は宇宙服に着替えて外へ出かける。

私の手製の宇宙服の主材料はビニールのふくろだ。ワードローブの包装材や、古着屋でもらったぶあつい手提げぶくろや、半透明のポリぶくろや、それからもちろんコンビニの買い物ぶくろやなんかを、梱包テープで念入りにつなぎ合わせて作りあげた、完全防水のかぶりものである。ただの大きなふくろではなくて、足はちゃんと二股に分かれているし、手の部分には毛染め用手袋を取りつけているから、宇宙服を着たままあやとりだってできる。

フリースの寝巻きを着たままで、私は宇宙服に身を包む。顔の前に来る透明で固いビニールが吐く息でくもってしまうのは、改善したい課題だけれど、いまのところは先延ばしにしている。もしこの内側の水分をなんとかする方法が見つかれば、この宇宙服は新しい雨具、ひょっとしたら水着としても売り出せるかもしれない。服を着たまま海水浴をして、楽しいかどうかはわからないけれど、こういうへんなものを買おうという人間はけっこういるのだ。

「ちゃんと呼吸とかできるんですか？」私が宇宙服の気密性を自慢したとき、春田さんは大きな瞳を上下に動かしながらそう言った。たしかに息苦しいし、一時間ぐらい経つと空気が薄くなって、軽くトリップすること

だってあるが、かといって隙間をつくってしまうと、雨水が入りこんで首すじや足首を不意打ちする。私はそういう不意打ちがきらいだから、この気密宇宙服を作ったのだ。

準備が整うと、私は宇宙服の上から古いスニーカーをはいて、玄関を開ける。時間はいつもだいたい深夜の三時すぎで、だからマンションを出てもまずい相手にぶつかることはない。私はなるべく暗い道、雨の夜にはだれも通らないような道を選んで、春田さんのいる墓地へ行く。一歩動くたびに全身のビニールがこすれあって、機械の鳥がはばたくような音が出る。特に股の下、左右のふともものの部分がぶつかるときの音が大きい。これは両足をわけたせいなのだけれど、わけないと歩きにくいし風にも弱くなるからしかたないのだ。

「傘ってさ、めちゃくちゃいいかげんな雨具だよね」と、先に言ったのは春田さんだったか、それとも私だったか。初めに話したときから、その意見はふたりでそろっていた。雨つぶを防げるのはとても狭い範囲で、その外に出てしまった荷物や服のすそはずぶぬれだし、横風が吹けば煽られて危険なときだってある。風がなくても、足元に跳ねてくる水滴は、まったく素通しだ。けれどいちばんたいせつで、私と春田さんが強くうなずきあったのは、そういう機能的な話ではなくて、傘をさすと景色が見られなくなるということだった。

雨の夜の平らな空を、立ち止まってじっくり見上げると、空気が意志を持って肺に入ってくる感じが味わえる。月も星も飛行機も見つからず、雲の凹凸さえわからない空から、水滴がじょじょに大きくなって顔にぶつかってくるまでを、しっかりとながめる。宇宙服を着ている私は、走って雨

宿りの場所へ駆けこむ必要もないし、傘の骨に頭上をふさがれることもない。歩きながらビニール越しに見る黒い夜空は、奇妙な話だけれど、晴れているときよりずっと大きく見える。私は雨つぶを全身に受け止めながら、一滴も水にぬれることなく、道路のまんなかを歩いていく。狭い道だから車なんか通らないのだ。

雨にぬれずに外を歩くには、宇宙服を着ることも、幽霊になることも、ともに最高の選択だろう。つまり、雨のなかでもぬれない体になればいいわけだ。春田さんは宇宙服を着た私を、はじめ幽霊だと思ったらしい。白っぽい格好で夜中に墓石のあいだを歩いていたから、たしかにそう見えたのだろう。けれど私のほうは、ずぶぬれで卒塔婆のかたわらにかがんでいる春田さんを、何か奇妙なものだとは思わなかった。長い髪から雨とは違う速度でしたたる水滴に目を奪われたとき、私は春田さんをそのままに認めていたのだと思う。

墓地の敷石は、常夜灯に照らされてつややかな色を出している。宇宙服の顔の部分のビニールはなるべく透明なものを選んだから、ものを見るのにほとんど差し障りはないのだ。私はいつもどおり、足を滑らせないように慎重に歩いた。この宇宙服は転んだりどこかに引っかけたりすると簡単に破けてしまって、惨めな思いをすることになる。

この墓地でいちばんこけが多くついていて、ほかの墓石よりずっと大きな石碑の前に、春田さんはいつもかがんでいる。今日も傘は持ってきていないらしく、ひだの多い灰色のワンピースが体に張りついている。雨の景色を眺めるには？　宇宙服を着るか、幽霊になるか、それともはじめからぬれることなんか気にしなければいい。

誠司さんという男友達には、会うたびに春田さんの話をしてやるのだが、誠司さんはどうもそれを私の冗談か妄想だと思っているふしがある。

「だいたいさ、そんな格好のやつに話しかけたりしないって」

誠司さんは以前私の家に来たとき、玄関の棚にしまってある宇宙服を見ている。

「だからそれは、何回も言ってますけど、」

春田さんと初めて会ったときの話を繰り返そうとする私を、じゃくいい加減なうなずきでさえぎって、誠司さんはファミレスの薄いメロンソーダを吸う。誠司さんの髪はいつもくんな形をしていて、ふたつの山型の盛り上がりが揺れるたびに、私は落ち着かなくなる。それに気を取られたこともあってくどくどと説明をする意欲が失せてしまい、私はデザートをつつきながら誠司さんの手の動きを見つめるしかなくなる。

誠司さんは学習塾で小学生を相手に理科を教えている。よく簡単な模型を見せたり工作をさせたりすることがあるそうで、食事が一段落するとかばんからいろいろな紙とはさみとのりとセロハンテープと下敷きを取り出して、その予習をはじめる。はさみをにぎって紙を加工していく誠司さんの手はとてもなめらかで、私は指と刃先がほとんど一体となって運動するさまにいつも見とれてしまうのだ。

今日はいつもの材料のほかに、ふたつのビー玉がテーブルに並んでいる。

「それはなんになるんですか？」

「簡単なおもちゃ」

誠司さんはストローをくわえたままそう言うと、すらすらと青い紙を細長

い形に切り出し、のりでわっかにくっつけ、つまんでそらまめのような輪郭の筒にしてしまう。それから筒の底に楕円の紙をセロハンテープでくっつけ、ビー玉を両方とも入れて、さらにまた楕円のふたをくっつけてしまう。こういう作業のあいだも、誠司さんははさみを手から離さないので、丸みを帯びた刃がふわふわ上下に揺れる。

紙筒を振って、なかに閉じこめたビー玉がかちかちいうのを私に聞かせてから、誠司さんは下敷きを斜めに立てた。

「あ、見たことあるかも」

私の予想どおり、誠司さんはビー玉入りの筒を下敷きの坂の上に置いて手を離した。筒は不規則な動きで転がりおりていく。

「なかのビー玉がひとつだと、しっかり転がらないときもあるんだけど、ふたつ入れておくとうまく転がるしさ、筒の動きも複雑になるんだ」

ふたり入ると複雑になるわけよ、と誠司さんはやはりストローをくわえたまま笑った。こういうくだらないことを気の利いたせりふのつもりで口に出す誠司さんが、私は嫌いではない。

春田さんが墓地に来るようになってからも、超人になるための儀式は続けていた。ただ、春田さんが大きな瞳で、いつものようにまばたきをしないで私を見ているかぎり、目をつむっても深呼吸をしても自分の鼓動のタイミングなんかつかめないだろう。だから私は春田さんが去るのを見送って、それから心臓が落ち着くまで、またしばらく墓地でのんびり待つことにしている。

私が墓地に行くと、最近は必ず春田さんが先に来ている。私を待ってい

るのかどうか聞いてみたことはないし、何時ごろから墓地にいるのか、晴れの日や昼間もいるのかもわからない。私たちはそういう個人的なことではなくて、もっと抽象的なことをしゃべる。傘について。だれも知らない鉱石について。セミの脱皮について。反重力について。バルカン半島の床屋について。忍者について。移民問題について。ザリガニについて。紙飛行機について。

春田さんが長靴以外の雨具を持ってきたことは一度もないし、私も雨具を貸したことはない。肌がぬれるのが好きだということらしく、屋根のあるところへ行こうとはしないで、私とならんで敷石に座っている。それで具合を悪くしたようすもないのだから、私なんかよりよっぽど健康的だ。体型はあまり変わらないが、むしろ春田さんのほうが細いくらいなのに、私は宇宙服に包まれていても少し震えてしまうことがある。ひょっとしたら春田さんは、乾燥しているとかえっていごこちが悪いのかもしれない。

一時間か二時間ぐらいしゃべって、そろそろ宇宙服のなかの呼吸が息苦しくなってきたころ、春田さんは唐突に墓地を出ていく。私がしゃべっているとちゅうだったり、春田さんがしゃべっているとちゅうだったりしても、まったくかまわずに去ってしまう。春田さんも私も時計を持ってきていないし、雨ふりでは天体の位置もわからないから、時間が来たから帰るというわけでもない。たとえばいちばん好きな星ときらいな星はなにか、という話をしているときも、

「きらいじゃなくてにがて？　おもしろいね。なんだか火星に行ったことあるみたいだね」

「にがてだし、きらいです。火星にはわたしたちのきらいな、それじゃ」

わたしたち？　といぶかしむ間もなく、すぱっと会話を打ち切って、春田さんはまだやむ気配のない雨のなかを去ってしまう。

それから、私は自分が落ち着くのを、息苦しさにくらくらしながら待つ。雨雲の凹凸が見えるようになってきたころ、私は立ち上がって背すじを伸ばして、こぶしを空に突き上げる。

しかし私は私のままで変わらない。その場で宇宙服を脱いで、私はとぼとぼとマンションへ戻る。朝の空気は天気が悪かろうと穏やかに感じられるけれど、こういうときはそれが腹立たしい。

春田さんに見つかってから十六度めの雨は、宇宙服も傘もいらないくらい弱かった。こけだらけの石碑の前に春田さんはいなかった。こんな雨では足りないのかもしれないと思いながら、私は春田さんがいつもかがんでいる位置にかがんで、それから地面にあおむけに寝転がった。私はもう、夜でも雲の色でこれからの雨量をだいたい当てられるくらいになっていたが、春田さんが今夜来る見こみはほとんどなさそうだった。だいたい、春田さんは私よりあとに来たことはないのだ。

水滴の重みで宇宙服が顔にはりつく。私は薄く目を閉じて、いろいろと個人的なことを考えた。会社の同僚のことや明日着る服のことや冷蔵庫の中身のことを墓地で考えたのは、今回が初めてだった。墓地というのはもともと個人的なものが集まった場所だけれど、供養に来る人間がいなくなってしまうと、だんだんそういうものは伸び放題の草に隠されてしまって、墓石だけが残る。

墓に入っている死人たちは、もちろん火葬されて粉になってしまってい

るのだけれど、墓地の地面の下に埋まっている白骨のイメージは、こうして頭を地面につけていると、どうしても抑えられない。宇宙服ごしに自分の腹に触れて、内臓のあいだに納まっているはずのピンセットを探してみる。けれど見つかる硬いものは骨ばかりだ。

一週間の予定と献立と着まわしをぜんぶ決めてしまっても、春田さんは現れない。浅い呼吸を続けて汗もかいてきたので、私はしかたなく宇宙服を脱いで、春田さんのようにしゃがんで雨に身を任せ、何度も深呼吸をした。霧雨ではあるけれど、全身があっというまに涼しいしめりけに包まれていく。吸いこむ空気は、自分の体温でぬるくなった宇宙服のなかの空気とは違って口のなかに溜まらず、のどへ通っていく。

どこかの墓に供えられていた茶わんが、からりと倒れた。墓石のあいだで、私を見て息をのんでいるのは、春田さんではなかった。

「すみません」

なにをしたというわけでもないのに、反射的に私は彼女に謝った。彼女も、なにも言いはしなかったが、頭をわずかに下げた。

彼女の髪は乱れていて、洋服も靴もどろどろに汚れてしまっている。まぶたはれていないから、頬がぬれているのは雨のせいだろう。彼女は私から目をそらし、また私のほうを見て、それから屋根のある小屋へ駆けていった。

小屋には墓石を洗うときに使う手桶やひしゃくが置いてある。戸がついているわけではないから、私からもなかのようすが見える。彼女は小屋へ入って、手桶を倒してその上に座った。私は石碑の足もとから離れることができなくなって、小屋のほうをながめていた。首すじから背中へ雨つぶ

が伝う。

彼女はうつむいて動かなくなった。眠ってしまったのだろうと思って、私はようやく体のこわばりをほどいた。今夜はもう春田さんは来ないだろうし、今日はどんなに姿勢を整えてこぶしを突きあげても、超人にはなれなさそうだったから、私はかたわらに畳んでおいたビニールの宇宙服を抱えて立ちあがった。

「ハーツ」

背後から低い声がした。春田さんの声とは比べものにならないくらい太くてぼそぼそと低い。振り向くと彼女は小屋の床にカードを並べていた。

「ハーツ」

彼女はもう一度、カードを並べながら私を見て言った。声色もばさばさした髪も地味な色の薄手の上着も気持ち悪かったが、私は小屋へ入って、ちょっと不自然な姿勢でしゃがんで、雨水を吸ったトランプを手に取った。

彼女はハーツのルールをあまり理解していないようだった。だいいち、ハーツは四人でやるゲームで、二人ではお互いの手のうちがすべてわかってしまうからおもしろみがない。彼女はぽいぽいと、ほとんどためらわずに手札を出していく。私はべつに勝つつもりはなかったから、負けられるようにトランプを並べた。だから最後までやるまでもなく勝敗は決まってしまったが、彼女はそれにも気づいていないらしく、だまったまま手元のトランプをどんどん地面に置いた。

私がおしまいまで手元に残った一枚を出してゲームを終わりにしようとすると、彼女は散らばったトランプをさっと片づけてしまった。

「それクラブのエースでしょ」

そのとおりだった。

「え、わかってたんだ」

「なまえは」

「私の？　北都」

私は本名を教えた。

「じゃあねほくとさん」

彼女は私の肩のわきをするりと抜けて、小屋を出ていった。どたどたした歩きかたを見ると、春田さんのたゆたうような足の運びと比べたくなってしまう。春田さんは長靴なのにさらさらと歩いて去ってしまうのだ。

　彼女はいったん立ちどまって、握っていたトランプを放り捨てた。雨水でお互いにくばりつきあっていたトランプは、ひとかたまりに地べたに落ちて崩れた。

「ユウコ」

かすれた声でそうつぶやいて、彼女は今度こそ見えなくなった。ユウコというのはどうも本名らしくないところがあったし、ひょっとしたら近くの墓碑から適当に文字を拾ったのかもしれないし、だいいち彼女がそれを名前のつもりで言ったのかどうかもわからなかったが、私は彼女をユウコだと思うことにした。

　ユウコの落としたトランプを集めて数字の順に整理してみると、ハートのエースがなくなっていた。私はトランプの束を手桶に放りこんで、クラブのエースだけを持って帰った。

　ユウコの話をすると、誠司さんの目つきが変わった。

「あのさ、まだあのビニールかぶって出かけてるわけ？」

「そうです」

「酸素が足りなくて幻覚かなんか見えてるんだよ。もうそういうのやめな。気絶して転んだら墓石に頭ぶつける」

いつ春田さんの話をしても誠司さんはくらくらしていたのに、今回はやけにまじめな口ぶりだった。はっきり言おうと前々から思っていたのかもしれない。今日は紙飛行機の工作をしていたのだが、それも中断している。はさみは持ったままだけれど。

「ごめんなさい」

「べつに謝ることないけど、危ないからさ。やめな。ほんとに」

誠司さんはささやくように言って私の目を見つめる。しかし私はいつものように誠司さんの髪型が気になってしまって、うわのそらで何度か謝罪を繰り返した。

「もうお墓には行きません」

最後にそう言うと誠司さんはやっと安心したらしく、背もたれに体を預けてファミレスのコーラを吸った。

「いまは幻覚のほうが北都に従属してるわけだけどさ、ぎりぎりでね。麻薬とかといっしょで、これからどうなるか怖いから。昼間に幻覚に振り回されたらやばいよ」

誠司さんは私を苗字で呼ぶ。

　春田さんになにか言わないといけないと思っていたが、それから三週間のあいだ、雨は昼間にしか降らなかった。私は駅からの帰り道、常に雲を

観察しながら歩いたが、夜になると降り出しそうな気配は消えうせてしまうのだった。三週間もそうしていると、どんどん体が重たくなってしまう。ところがある晩、さすがにくったりして帰宅するなりベッドに倒れこんだとたん、強い雨音がしはじめた。私はあわてて窓を開けた。夜を担当する雲がこらえきれなくなったようで、道路にはもう川ができていた。

石碑のそばにかがんでいたのはユウコだった。さしている淡いピンクの傘に大つぶの雨が当たってひどい音を立てていたが、ユウコは私の足音を聞き分けて気づいたらしく振り返った。顔はわずかに化粧されていたが、あまり似合っていない。そういえば、いま茶色く染まっているユウコの髪は、以前は黒くてぱさぱさしていたような気がする。

私はだいぶためらったあと、視線を外した。墓石には死者の苗字が刻まれている。有森家先祖代々ノ墓。小嶋家ノ墓。なんとかけのはか、口に乗せてみると、弔いにはそぐわないほがらかな感じだ。

ユウコは傘を投げすてた。するとみるみるうちに薄手の服がぬれてユウコの体に張りつき、下着のラインが浮かびあがった。

「んん」

ユウコは大きく口を開けてあくびをし、そのまま両手をあげて伸びをした。服が引っぱられて、胸や腰やもものの形がさらに明らかになった。

ユウコはどんどん伸びた。背すじが伸びくちびるが伸び腕が伸びた。それだけでなく横の方向にもユウコは広がっていった。服はすぐ裂けて、もうばらばらになっていた。だからいまユウコは裸で、上のほうに引っかかっているのがたぶんブラジャーなのだけれど、ユウコの乳房は腹や肩や足首や肩甲骨と区別がつかなくなってしまっている。

ユウコはいまや、爪や毛髪がそこかしこについた赤みがかった肉のかたまりとなっていた。ユウコが全体をぶよぶよと震わせると、墓石がかんたんに倒れて、うしろの墓石の角を砕いた。暗くてユウコがどこまで大きくなったのかはよくわからない。雨が肉の表面を汗のように流れる。

ついにこのときが来たのだ。ユウコの膨張に合わせて急いであとずさりながら、私は自分の鼓動を確認した。

いたるところに乱雑についているユウコの口のうちのひとつがなまぬるい息を吐き出すと、ビニールの表面の水滴が黄色くなった。おそらく強烈な臭いがするのだろうが、私は宇宙服のなかにいるのでへいきである。

何本あるのか数えられないほど多くの足で、ユウコはゆっくりと移動をはじめた。幼いころから頭を離れない地鳴りのような足音が、いまビニールをびりびりと震わせ、墓石を傾かせた。

ユウコは私が住むマンションがある南の方角へ動き出した。墓地のやわらかい土がユウコの重みでへこんで、その穴からはあるはずのない人骨がいくつも顔を出した。ユウコは木を踏み折りながら、というより巨体でブルドーザーのようにどかしながら、墓地を出ていく。

黄色い骨を踏み折りながら、私はクレーターのまんなかへ走った。あの大きなこけだらけ墓碑が伏している。ユウコの吐き出すべとべとした液体が私の頭を飛びこえて、墓地や寺の木にかかった。汚物じみた色になる木もあれば、葉が一瞬にまっさおになってしまう木もあった。

私は急いで背すじをまっすぐにし、まぶたを強く閉じて顔を雨雲に向けた。むりに吸いこむまでもなく、空気が深く肺を見たしていく。足は肩幅。左手のこぶしを強く握る。右のこぶしを勢いよく高く突きあげる。まぶた

の裏がわの景色が赤で染まり、すぐにまぶたが溶けてなくなる。私は大きく変化していく。強く。もっと大きく。

私は寺の屋根を踏みつけながら、水しぶきをあげて雨のなかを突進した。走るだけで強い風が起こって、私の前の雨つぶを吹き飛ばしてしまう。台風のような音を立てながら、私はユウコに跳びかかって力任せに殴りつけた。表面は触ってみるとゾウの皮のようだった。墓石をつかみあげられるぐらい大きくなった私のこぶしが、手ごたえなくずぶずぶとめりこんでいく。

ユウコは平屋を蹴散らしながら歩くのをやめない。ふとんの山を殴っているような感覚が終わらないので、私はすねで電線をちぎってしまいながら、ユウコからいったん離れて自分の体を見る。

雨でぬるつきはじめた、なめらかな皮膚の下で、外から見てもわかるほど強く心臓が脈打っている。ユウコの背中に何度も蹴りを入れるが、ユウコはまったく動じないで、道路に亀裂を入れながらのんびり歩いていく。蹴るたびにぱちんぱちんと情けない音がするけれど、それは強い雨音とユウコの歩く地響きにかき消される。

私はついに我慢できなくなって腕を振り回した。頭が破裂しそうに痛むので、私は頭を抱えて大声で叫ぶ。ところが声は出ない。かわりに青白いものが私の両腕からぴょんと出て、ほとんど直線を描いて雨のなかを飛び、ユウコの背中についている丸い口をいっぱいに満たす。口に内向きに生えたたくさんの牙が次々と折れていくのに、ユウコはまったく気にかけずに、ピラミッドのような体を引きずって歩きつづける。

がんがんしていた頭痛がふっつりと消えて、こんどは吐き気と寒気が全

身を襲う。私は巨大な体を震わせながら、ほとんど崩れるようにもとの墓地にかがみこみ、そのまま横たわった。

骨がころころと転がっているくぼ地のまんなかで、私は内臓にたっぷり詰まったものを取り出そうと必死で吐きつづける。あごがうまく開かず、くちびるの先から白いものがぽたぽたとこぼれて、のどを伝って裸の胸にかかってしまう。破れた宇宙服の切れはしが指にくっついて取れない。液体を人骨の上にばらまくと、ぬかるみの雨水と混じって流れていく。くぼ地に私の吐瀉物がたまっていく。雨水で薄まった白い液体の表面がぷるぷると揺れるのは、ユウコがまだ歩いているからでもあるし、裸の私がひどく震えているからでもある。起き上がろうとしたけれど力が入らなくて、吐きだしたものの上に倒れてしまった。水たまりから離れるように転がって仰向けになる。おなかに泥とねばっこいものが混ざって付いていて、くその部分だけ白さが濃い。私は首だけを横に向けてまだ吐きつづける。ぬるぬるするおなかを自分で押すと、そのぶんだけ中身が口から出てきた。

熱いのどをなにか硬いものがせりあがってくる。たまらず指をつっこんでかきだすと、それは医療用のばかでかいピンセットだった。やっと出てきたのだ。角をおおっていたあぶらみのようなものを爪でそぎ落とすと、ピンセットはまったく錆びていなかった。私はこれを吐き出したかったのだ。吐き気は治まり、私は口をぬぐって呼吸を整えながら、ピンセットを投げた。

「だから言っただろ」

ピンセットは空中で誠司さんのはさみに変わった。伏している私の顔を誠

司さんはのぞきこんだ。私はあまりのことにまったく声が出ない。

「もっと楽に出てきてもよかったんだ。ちゃんとおれに従わないからこういう羽目になる」

白い液体にまみれた誠司さんの頭がふたつに割れて、誠司さんは春田さんと誠司さんに分かれる。春田さんは丸い瞳を輝かせて私を見下ろす。春田さんの目は黒目も白目もきらきらしていてきれいなのだ。

「な、春田さんは幻覚なんだって。北都につごうよく従う妄想なんだ」

誠司さんと同じように白いどろどろを全身につけた春田さんは紙飛行機を投げる。ぬれて重たくなった飛行機はすぐに墜落する。

「あなたが幼いころに内臓に入れて、それからずっと育ててきた。いつまでもあなたに従属しているのはにがてです。火星とおなじくらい」

口のなかにはまだ白いものが残っていてねばねばする。

「じゃ誠司さんも私の妄想なんですか」

雨がふたりの体を洗い流していく。私が吐き出した白いものはやわらかい土にしみこんでしまう。

「そう、春田さんも俺もだ。差はない。男でも女でもない」

男でも女でもないなら、火星のきらいな宇宙人だろうか。

　はるたさん。

　せいじさん。

「わたしたちの従属はこれで終わったのです。地球はわたしたちにとって住みよいところになるでしょう。わたしたちは地球に住むことにします」

私ではなく私の外に。私の上に。

　私は勘違いしていた。侵略者はこいつらだった。紙飛行機はついさっき

落ちたのだ。

私は立ちあがって南へ走り出した。泥が足をもつれさせるが行かなくてはならない、ユウコと正確にひとつになるために。

誠司さんはストローをくわえてほっほっと笑う。春田さんもスカートを揺らしながらほっほっと笑う。ゴム長靴をはいたふたりがならんで倒れた石碑のうえに立つと、その長靴の下で、びっしり生えていたこけがあっというまに枯れて流れた。

ユウコの何本もの足のなかにはもともと手だったものがあるはずだった。うまくそれに当たればよいが、間違えれば私はくしゃんこになってそれでおしまいだ。道はユウコが大きく広げてくれているから私はまっすぐ行けばよい。裸で走っていると、笑い出したい気分になってくる。宇宙服は破れて使いものにならなくなってしまったから、幽霊ではない私は、もうぬれることを気にしてはいられない。

背中になにか張りついているようなので、木の葉かと思ってはがしてみると、ふにゃふにゃになったクラブのエースだった。ユウコはハートのエースを持ってきただろうか？　雨音と足音が鼓膜と鼓動を叩く。

私はユウコに追いついて、そのまま彼女の下に走りこんだ。ドラム缶ぐらいに太い足のあいだを、目印を血まなこで捜しながら駆ける。びっしりとあるうろこのなかに、ハート型のものを見つけた気がするが、もう確証はない。その足が次の一歩のために持ち上がる。私はその真下へ転がりこんで、もう紙のかたまりになってしまったかもしれないトランプを握りしめて、踏みおろされてくる足の裏を殴るように、思いきり拳を突き上げる。